平成28年度
卒業証書・学位記授与式　－学長告辞－

水温む季節となり、川面に踊る光に心が弾み、構内を吹き抜ける風に春の香りを感じる頃となりました。

本日、卒業証書を授与された１６８名の皆さん、ご家族の皆様、ご卒業誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。また、ご多用のところ、ご臨席賜りましたご来賓の皆様に心より感謝申し上げます。

さて、卒業生の皆さんが、本日無事に卒業できるのは、皆さんの努力があったことはもちろんですが、家族、友人、教職員、地域の方々など多くの人たちの支援があったことを決して忘れないでください。

科学技術の進歩、交通や情報網の発達等で、私たちを取り巻く社会は日々急激に変化し、生活様式や人々の価値観にまで影響を及ぼしています。また、社会のグローバル化も指摘され、教育現場にもその対応が求められています。しかし、グローバル化は新たな課題ではなく、これまでの日本の歴史をみても、国外から技術、文化などに限らず様々なものが流入してきました。それとともに常に国際的な視野に立ち日本の将来について考えることが求められてきました。世界の中にある日本を見つめ、国や地域を考え、自分の置かれた立場を考えることは必要不可欠であります。私たちはいつも、日本の国だけではなく、世界の人とともに共同社会を築いていることを自覚している必要があります。そのような中で、教師として一社会人として、変わらないものは何か、変化に対応しなければならないものは何かを、常に考えていかなければなりません。

皆さんは、大学生活の中で、優秀な教師あるいは社会人になるために、大学の授業だけでなく、部活やボランティア、アルバイトなど様々な形で多くの人々と接し、その中から様々なことを学び、身につけてきたことでしょう。それは、皆さんが教壇に立ったとき、社会人となったとき、全て役に立ちます。特に教職の最もすばらしい点は、これまでに獲得した知識・技能、経験、失敗までもが全て日々の教育に生かせる点だと考えています。

本学で学ばれた皆さんは、教師として社会人としての資質能力を十分に身につけていただいたと思います。どうぞ自信を持って、教壇に立ち、あるいは社会に羽ばたいてください。しかし、社会は加速度的に変化し、学校で教える内容や教育技術もめまぐるしく変わっています。

先日公表された学習指導要領等の改訂のポイントでは、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、３つの柱、１つは知識及び技能、２つ目は思考力、判断力、表現力等、３つ目は学びに向かう力、人間性等、が示されました。また、「主体的・対話的で深い学び」を通して、子供たちが「何ができるようになるか」を明確化することが求められています。主体的・対話的で深い学びの充実には、習得・活用・探

求のバランスを工夫することが重要であるとも指摘されています。さらには、時代の変化や自分のおかれた立場において求められる力、新たな課題に対応できる力に加えて、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力も必要とされています。

これらの課題等を克服するためには、常に情報を収集する姿勢を保ち、周囲の人たちとの協力関係を強固なものにしておかなければなりません。大きな課題に立ち向かわなければならず、途方に暮れることもあるでしょう。そのときこそ、家族や先輩、友人などの支えが必要です。皆さんには、上越で得た友だちや教職員、地域の人たちとの強い絆があるはずです。大学もいつも皆さんの前に開かれて支援する体制を取っています。

これからの教育においては、子供の学ぼうとする力や気持ちを引き出すことができることが重要です。子供の個性や性格を的確に把握し、子供が自ら学ぼうとする意欲を高めることが大きな教育成果につながります。子供を温かく見守るために、教師は人格を磨き、包容力を高める必要があります。子供の学ぼうとする気持ちを引き出すためにも、教師自らが学ぼうとする意欲を持ち続けてください。自分が完成したと感じたとき、あるいはもう新しい力はつけなくても良いと考えたとき、それ以上の進歩はありません。それ以上自分の能力を伸ばすことはできません。自分が未完成であることを自覚し、謙虚な気持ちで学び続ける姿勢が最も重要です。

謙虚に自分の力をみつめたとき、自分の力不足に愕然とするかもしれません。しかし、焦ることはありません。地道に着実に努力を続ければ大丈夫です。大きな課題に直面したときも、まず目の前の課題から焦らず取り組めば、必ず道は開けます。

中国の思想家 孔子は論語の中で、「人の生くるは直し」と述べています。人が生かされているのはその人がまっすぐだから、ということですが、私は、人が生きていくには実直であること、つまり誠実であることが最も大切であると解釈しています。自分の信じた道を一歩一歩誠実に歩んでください。また、誠実に勝る教育はないと思います。私は、自分のこれまでの恩師を思い出すとき、まじめに実直に教えてくれた先生が最も印象に残っています。ある種の懐かしささえ感じます。「人の生くるは直し」、人は実直に生きるのが一番と言うことを身をもって教えていただきました。

健康に十分注意して、多くの子供たちから慕われ、いつかは先生のようになりたいと思われる教師となってください。皆さん一人ひとりが自らの手で輝かしい未来の扉を開け、人生を充実したものにしていただくことを心より祈念し、告辞とします。

平成 29 年 3 月 18 日

国立大学法人上越教育大学長　佐藤芳徳